

## 大学生における自我同一性地位と充実感に関する一研究

森 美 海 子\*・河 村 茂 雄\*\*

(2001年1月9日受理)

Mimiko Mori Shigeo Kawamura

A Study of the Ego Identity Status and the Fulfillment Sentiment in Undergraduates

### I 問題と目的

青年期は、本来の自己に気づき、大人としての自己を再定義していく時期であり、鍵概念としてErikson (1959) のアイデンティティ理論, Marcia, J.E. (1966) の同一性地位概念があげられる。加藤 (1983) はMarcia, J.E. (1966) が仮定した、自我同一性を規定する2つの心理社会的要因である「危機 (crisis)」および「自己投入 (commitment)」を基に、同一性地位を6つに類型化した。そして、各個人の全体的な同一性の状態と、諸領域・諸時点における危機および自己投入の水準の関係から、同一性形成における諸領域の重要性を検討し、あわせて4つの典型同一性地位について、その特徴を明らかにしている。さらに、性差についても包括的な検討を行っている。結果、男女に共通する特徴としては、「将来の仕事」と「望ましい生き方や価値」への自己投入の水準、ならびに「自分が目指すべき生き方や価値」についての危機の水準に、同一性地位群間で有意な差が認められた。

西平 (1979) は「現代青年の生きがい感・しらけの気分は、信頼・不信、自立・甘え、連帯・孤立の3つの軸から説明される」という現代日本青年の心情モデルを提示した。それを踏まえ大野 (1984) は、充実感、生きがい感は、その青年の健康なアイデンティティの実感であるという仮定に基づき、西平の心情モデルについて検討した結果、その内容を以下のように拡大した。充実感・生きがい感・しらけの気分は、充実感気分・退屈空虚感因子に示された生活気分としての感じ方と、他の3因子 (自立・自信・甘え・自信のなさ因子、連帯・孤立因子、信頼・時間的展望・不信・時間的展望の拡散因子) に示されたアイデンティティを中心とした漸成発達理論に示された各主題に関係していると考えられる感じ方の2つに分けられるものであり、この両者には、高い相関関係があることを明らかにしている。また、より安定しているアイデンティティに関連する各側面の水準が、より不安定な生活気分の水準に影響を及ぼしているという因果関係が推測できるものであると

---

\* 岩手大学大学院教育学研究科心理学専攻

\*\* 岩手大学教育学部

考察している。続けて、大野（1983, 1984, 1987）は、充実感とアイデンティティの統合度について、面接法やさまざまなアイデンティティに関する尺度を用いて、その関連性を吟味した結果、一般的なアイデンティティの統合度と充実感には高い関連が存在していることを見出している。

加藤の研究が行われた80年代前半と現在とでは、大学生を取り巻く環境は変化しており大学生の同一性地位の諸特徴も変化していることが考えられる。現代の大学生の同一性地位を検討する際、Erikson(1959)の提示した心理社会的モラトリアム、およびMarcia, J. E. (1966)のmoratorium statusに、日本の青年の「モラトリアム」はあてはまらないという指摘や日本の大学生のモラトリアム状態をより分化した構成概念として把握している研究もあるが（小此木, 1977; 加藤, 1983; 西平, 1979; 下山, 1992）、そのような青年像を考える上でも、Marcia, J. E. (1966)の同一性地位概念に基づいて、現代に生きる大学生の諸特徴を実証的に検討することは意味があると考えられる。また、大野の諸研究では、充実感とアイデンティティとの関連の検討において、その統合度の高さに力点が置かれている面があり、充実感と同一性地位類型との関係についての詳細な検討はなされていない。

よって、本研究では、Marcia, J. E. (1966)、加藤（1983）の自我同一性地位の考えに従い、同一性達成地位（Achievement）、権威受容地位（Foreclosure）、積極的モラトリアム地位（Moratorium）、同一性拡散地位（Diffusion）における、現在の生活の充実感、さらに現在重要視している具体的な諸領域との関係について、その様相を各地位ごとに検討

表1 自我同一性地位判定尺度の質問項目（加藤, 1983）

質問項目

現在の自己投入

- ・私は今、自分の目標を成し遂げるために努力している
- ・私には打ち込めるもの（夢中になれる、没頭できる）ことがある
- ・私は、自分がどんな人間で何を望み行おうとしているのかわっている
- ・私は、「こんなことがしたい」という確かなイメージを持っていない

過去の危機

- ・私はこれまで、自分について自主的に重大な決断をしたことがない
- ・私は、自分がどんな人間なのか、何をしたいのかということがかつて真剣に迷い、考えたことがある
- ・私は、親やまわりの人の期待にそった生き方をする事に疑問を感じたことはない
- ・私は以前、自分のそれまでの生き方に自信がもてなくなったことがある

将来の自己投入への希求

- ・私は、一生懸命打ち込めるものを積極的に探し求めている
- ・私は、環境に応じて、何をすることになっても特にかまわない
- ・私は、自分がどういう人間であり、何をしようとしているのかを、今いくつかの可能な選択を比べながら真剣に考えている
- ・私には、自分がこの人生で何か意味のあることができるとは思えない

することを目的とする。

表2 充実感尺度の質問項目 (大野, 1984)

質問項目

**充実感気分—退屈・空虚感**

- ・ 毎日、毎日変化のない単調な日々でつまらない
- ・ 生活に充実感で満ちた楽しさがある
- ・ 私は生きがいのある生活をしている
- ・ 毎日の生活にはりがある
- ・ 毎日の生活に退屈している

**自立・自信—甘え・自信のなさ**

- ・ 私は精神的に自立していると思う
- ・ 私は主体的に生きていると思う
- ・ 私は独立心が強いと思う
- ・ いざとなるとどうしても人を頼ってしまう
- ・ 自分の信念にもとづいて生きている

**連帯—孤立**

- ・ だれも私を相手にしてくれないような気がする
- ・ 私ひとりがとり残されているようで寂しい
- ・ 自分がなさげなくていやになる
- ・ 私をわかってくれる人がいないと思う
- ・ 自分の理想とはかけ離れた今の生き方に焦燥感を感じる

**信頼・時間的展望—不信・時間的展望の拡散**

- ・ 自分の責任をはたすことに喜びを感じる
- ・ 生まれてきてよかったと思う
- ・ 毎日の生活でものをやりとげる喜びがある
- ・ 私には毎日の生活の中で何かへの使命感がある
- ・ 私は価値のある生活をしていると思う

## II 方法

**調査対象** 国立A大学の1~4年生332名(男子139名, 女子193名)を対象とした。

**調査時期と手続き** 1999年7月, 調査対象の大学生に自我同一性地位判定尺度(加藤, 1983, 表1), 充実感尺度(大野, 1984, 表2), 領域別自我関与質問紙を実施した。

自我同一性地位判別尺度は, Marcia(1966)の同一性地位概念を踏まえて, (1)一般的な(領域を特定しない)「現在の自己投入」の水準, (2)一般的な「過去の危機」の水準, (3)一般的な「将来の自己投入の希求」の水準の3変数の値を3分割し, それを組

み合わせて6つの同一性地位が設定されている。これにはMarciaによる同一性地位 (identity status) アプローチには明記されていない、2つの地位が加えられており、大学生の現状をより適切に把握できると考えられる。本研究では、A：同一性達成地位 (Achievement)、D：積極的モラトリアム地位 (Moratorium)、C：権威受容地位 (Foreclosure)、F：同一性拡散地位 (Diffusion) の4つの典型地位について以下の尺度との関連を検討する。

充実感尺度 (大野, 1984) に関しては、その内容として、「毎日、毎日変化のない単調な日々でつまらない」(逆転項目)、「生活に充実感で満ちた楽しさがある」などの項目に示される生活気分としての側面と「自立・自信-甘え・自信のなさ」、「連帯-孤立」、「信頼・(時間的展望)-不信・(時間的展望の拡散)」というアイデンティティの感覚や、それにまつわる自我感情と考えられる側面とがあり、4つの下位尺度からなる。評定は「あてはまらない(1点)」から「あてはまる(5点)」までの5件法である。因子ごとの合計点が高いほど、充実感における各側面での認知が高いと考えた。

領域別自我関与質問紙に関しては、加藤(1983)による領域別危機-自己投入質問紙の項目を参考にして、現時点での12の領域についての自我関与の水準を聞いた。自我関与は「重要である程度」という表現で、4件法によって回答を求めた。特に重要ではないという水準が1点、非常に重要であるという水準が4点である。

表3 自我同一性地位の分布

自我同一性地位	本研究 (332人)	加藤(1983) (310人)
A: 同一性達成地位	63 (18.9%)	36 (11.6%)
B: A-F 中間地位	15 (4.5%)	38 (12.2%)
C: 権威受容地位	14 (4.2%)	12 (3.8%)
D: 積極的モラトリアム地位	51 (15.4%)	47 (15.2%)
E: D-M 中間地位	140 (42.2%)	165 (53.0%)
F: 同一性拡散地位	49 (14.8%)	12 (3.8%)

### Ⅲ 結 果

#### 1) 自我同一性の分布

加藤(1983)の指摘した分類基準にしたがって、被験者の自我同一性を分類した(表3)。調査対象の内訳は、A：同一性達成地位 (Achievement) 63人、B：同一性達成-権威受容地位 (A-F中間地位) 15人、C：権威受容地位 (Foreclosure) 14人、D：積極的モラトリアム地位 (Moratorium) 51人、E：同一性拡散-積極的モラトリアム地位中間地位 (D-M中間地位) 140人、F：同一性拡散地位 (Diffusion) 49人であった。本研究の分布の割合と加藤(1983)の分布の割合とを比較すると、A-F中間地位が10%前後であること、権威受容地位が5%以下と少ないこと、積極的モラトリアム地位が15%前後であることで、同じ傾向が認められた。しかし、同一性達成地位が20%と増加していること、D-

M中間地位が42%と減少していること、同一性拡散地位が15%と増加していることに違いが認められた。つまり、本研究の対象者は、加藤の研究における大学生の一般的傾向と比べて、D-M中間地位が減少し、同一性達成地位と同一性拡散地位の割合が大きい傾向が示された。

表4 各同一性地位 (A, C, D, F) ごとの充実感の得点の平均値と標準偏差およびF値 (N=173)

	A(62)	C(14)	D(50)	F(47)	F値	多重比較
充実感-退屈・空虚感	17.61 (5.14)	17.21 (4.73)	14.1 (5.07)	10.97 (4.51)	17.85***	A,C>D>F
自立・自信-甘え・ 自信のなさ	16.86 (3.81)	15.5 (3.5)	14.74 (3.24)	11.62 (3.88)	18.61***	A>D>F C>F
連帯-孤立	15.32 (5.95)	17.14 (6.6)	14.20 (4.69)	11.30 (3.75)	7.49***	A,C,D>F
信頼・時間的展望- 不信・時間的展望の拡散	20.53 (2.67)	19.36 (3.46)	16.90 (3.49)	14.32 (3.01)	39.46***	A,C>D>F

( ) 内は標準偏差

\*\*\* :  $p < .001$

表5 各同一性地位ごとの充実感における下位尺度間の相関

	充実感気分-退屈・空虚感			
	A	C	D	F
自立・自信-甘え・自信のなさ	.472***	.100	.123	.502**
連帯-孤立	.480***	.073	.327	.321
信頼・時間的展望-不信・時間的展望の拡散	.429**	.687***	.599***	.579***

	自立・自信-甘え・自信のなさ			
	A	C	D	F
連帯-孤立	.236	.063	.303	.407**
信頼・時間的展望-不信・時間的展望の拡散	.334	.346	.091	.300

\*\*\* :  $p < .001$

\*\* :  $p < .01$

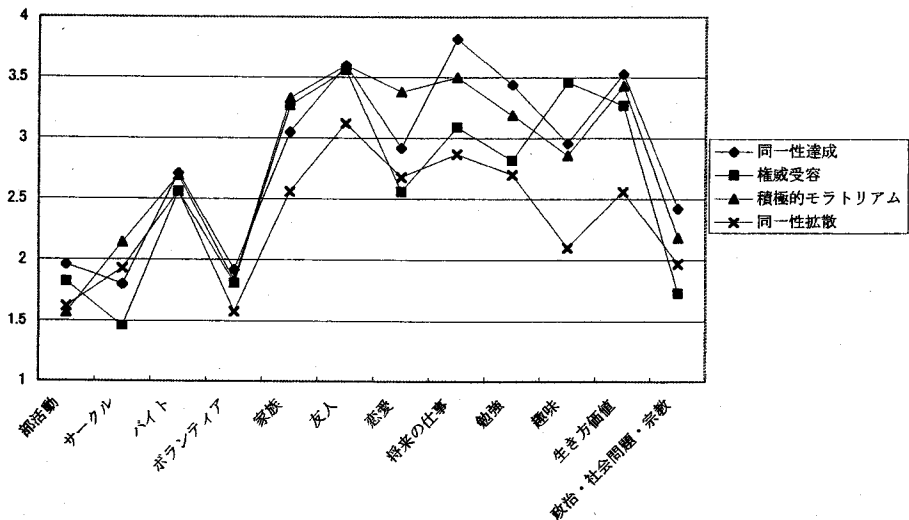
表6 各同一性地位ごとの諸領域における自我関与の得点と標準偏差およびF値(N=156)

	A(52)	C(14)	D(42)	F(48)	F値	多重比較
部活動	1.96 (1.27)	1.82 (1.25)	1.57 (.94)	1.62 (1.02)	1.21n.s.	
サークル活動	1.81 (1.12)	1.46 (.82)	2.14 (1.22)	1.93 (1.19)	1.28n.s.	
バイト	2.71 (1.11)	2.56 (1.51)	2.69 (1.22)	2.56 (1.18)	.176n.s.	
ボランティア活動	1.92 (1.12)	1.81 (1.08)	1.83 (1.01)	1.58 (1.01)	.92n.s.	
家族関係	3.06 (1.11)	3.27 (1.19)	3.33 (1.03)	2.56 (1.11)	4.14**	D,A,C>F
友人関係	3.60 (.82)	3.56 (.93)	3.60 (.70)	3.13 (1.04)	3.10*	A,D>F
恋愛	2.92 (1.12)	2.56 (1.13)	3.38 (.94)	2.69 (1.27)	3.41*	D>A,F,C
将来の仕事	3.83 (.55)	3.09 (1.22)	3.50 (.83)	2.88 (1.02)	9.51***	A>D,C,F D>F
勉強・研究	3.44 (.85)	2.82 (1.25)	3.19 (1.02)	2.71 (1.03)	5.03**	A,D>F A>C
自分にふさわしい趣味	2.96 (1.15)	3.46 (1.04)	2.86 (1.14)	2.10 (1.06)	7.52***	C,A,D>F
自分が目指すべき 生き方や価値	3.54 (.85)	3.27 (1.10)	3.43 (.83)	2.56 (1.09)	10.32***	A,D,C>F
政治・社会問題・宗教 に対する自分の態度	2.42 (1.24)	1.73 (1.01)	2.18 (1.10)	1.98 (1.14)	1.80n.s.	

( )内は標準偏差

\*\*\* :  $p < .001$  \*\* :  $p < .01$  \* :  $p < .05$

図1 各同一性地位ごとの自我関与水準



## 2) 同一性地位類型と充実感

### ①各同一性地位ごとの充実感の下位尺度得点

加藤 (1983) の手続きによって分類された各地位について学年および男女による出現頻度を検討したところ、同一性地位についての学年差および性差は認められなかった。

次に、同一性地位の6類型から、Marciaの分類にみられる「同一性達成」「積極的モラトリアム」「権威受容」「同一性拡散」の4地位を取り上げ、各同一性地位別の得点の平均と標準偏差を表4に示した。その結果、充実感の全ての下位尺度得点の合計において、同一性達成地位群が最も高く、同一性拡散地位群が最も低かった。被験者のカテゴリー間の得点差を検討するために、充実感の下位尺度得点の合計に、分散分析およびFisherのPLSD法による多重比較を行った。結果、「充実感-退屈・空虚感」、「信頼、時間的展望-不信・時間的展望の拡散」では、「同一性達成」「権威受容」は「積極的モラトリアム」「同一性拡散」より有意 ( $p < .01$ ) に高く、「同一性拡散」は他のどの地位より有意 ( $p < .01$ ) に低かった ( $A, C > D > F$ )。また、「自立・自信-甘え・自信のなさ」では、「同一性達成」が「積極的モラトリアム」「同一性拡散」より有意 ( $p < .01$ ) に高く、C, D地位はF地位より有意に ( $p < .01$ ) 高かった ( $A > D > F, C > F$ )。「連帯-孤立」では、F地位がA, C, D地位より有意 ( $p < .01$ ) に低かった ( $A, C, D > F$ )。よって、Marciaの分類にみられるの4つの典型地位についての検討に、充実感における4つの下位分類の全てが差異として捉えることができることが示唆された。

### ②各同一性地位ごとの充実感における下位尺度の相関

各同一性地位別の充実感の下位尺度の得点の関係を検討するために、相関係数を求めた(表5)。「同一性達成」では、「充実感気分-退屈・空虚感」において、「自立・自信-甘え・自信のなさ」、「連帯-孤立」、「信頼・時間的展望-不信・時間的展望の拡散」と有意な中程度の相関 ( $r = .47, p < .01$   $r = .48, p < .01$   $r = .43, p < .01$ ) が認められた。「権威受容」「積極的モラトリアム」では、「充実感気分-退屈・空虚感」において、「信頼・時間的展望-不信・時間的展望の拡散」と有意な中程度の相関 ( $r = .69, p < .01$   $r = .60, p < .01$ ) が得られた。「同一性拡散」では「充実感気分-退屈・空虚感」において、「自立・自信-甘え・自信のなさ」、「信頼・時間的展望-不信・時間的展望の拡散」と有意な中程度の相関 ( $r = .50, p < .01$   $r = .58, p < .01$ ) が得られた。また、「同一性拡散」のみ、「自立・自信-甘え・自信のなさ」において、「連帯-孤立」と中程度の有意な相関 ( $r = .41, p < .01$ ) が得られた。「連帯-孤立」と「信頼・時間的展望-不信・時間的展望の拡散」との相関関係は、どの地位においても認められなかった。よって、各同一性地位ごとの充実感の下位分類間の相関関係は、地位ごとに差異があることが示唆された。

## 3) 諸領域における各同一性地位の自我関与水準

各同一性地位の得点の平均と標準偏差を表6に示した。なお、各同一性地位ごとに、諸領域における自我関与水準の平均点をグラフに示した(図1)。被験者のカテゴリー間の得点差を検討するために、諸領域ごとの得点に、分散分析およびFisherのPLSD法による多重比較を行った。結果、有意差が認められた領域は以下の通りである。「将来の仕事」、

「自分にふさわしい趣味」, 「自分が目指すべき生き方や価値」 ( $p < .001$ ), 「家族関係」, 「勉強・研究」 ( $p < .01$ ), 「友人関係」, 「恋愛関係」 ( $p < .05$ ) の7領域であった。これらの領域は各同一性地位間の差異を検討するのに有効と考えられる。

## IV 考察

### 1) 同一性地位の分布

本研究の対象者は、加藤の研究における大学生の一般的傾向と比べて、D・M中間地位が減少し、同一性達成地位と同一性拡散地位の割合が大きい傾向が示唆された。Erikson (1959) によると、積極的モラトリアム地位の青年像が自我同一性確立過程の典型像であり、それが従来の青年心理学の定説であったが、本研究においても加藤の研究と同様に全体の15%前後と少なく、D・M中間地位や同一性拡散地位といった拡散傾向にある者が全体の6割を占めている。この分布状況は、調査対象となった大学生をとりかこむ心理社会的状況によって変動するものと考えられるが、加藤の研究時期と現在を比較すると、対象となった大学生は、高学歴社会に生まれ、激しい進学・受験体制の下で決められたレールに乗り、大学を目指してきたという状況はそれほど変化していない。その状況は大学進学率は年々上昇し、2000年には大学・短大への進学率が過去最高の49.1%を記録していることから予測できるものである。このことから、日本特有の競争・管理社会、激しい受験戦争と密接に結びついたものとして、小此木 (1977) が指摘した、新たな日本の青年像として、Eriksonの提示した心理社会的モラトリアムとは全く異なる全能感、しらしけ、遊び感覚という特色をもつ「モラトリアム心理」をもつ大学生や、80年代から大学生の心理・行動的障害として問題になりはじめたスチューデント・アパシー (Student Apathy) の状態、もしくはそれに近い状態にある者が、加藤の研究や本研究においても、調査対象となった大学生の中に相対的に多く存在することが考えられる。そういった大学生は自我同一性確立に不可欠な、自己を確認するための目標の自覚や努力を内容とする「現在の自己投入」の水準、自分とは何かという問いに対し試行錯誤した経験を内容とする「過去の危機」の水準、将来についての意欲と探索を内容とする「将来の自己投入」の水準が低く、D・M中間地位や同一性拡散地位に属するものと考えられる。

続いて、加藤の研究時期との比較に際し、特に注目すべき変動は、同一性拡散群の割合の増加である。ここには、景気の変動に伴う大学卒業後の就職率の低下が大きく影響している可能性が考えられる。大学生の就職率は年々減少し、1997年では65.6%、2000年では過去最低の60.1%を記録している。就職難とされる現代において、将来展望の見通しが立てられなくなり、悩んだり、もしくは考えることを放棄してしまう大学生もいることが推察できる。また、一方で、この就職率低下の背景には青年の職業観の変化も一要因とあげられるであろう。80年代後半からの、青少年の生き方に関する諸種の調査結果によると、自らの生きがいを社会とのかかわりの中に求めるのではなく、私生活の中に見出そうとするものになっており、未来よりも現在を中心に生きる生き方を希望する割合が高いことが示されている。また、加藤 (1987) は、当時の青年の特徴として、時と場合に即応する柔軟性や一定の生き方に固執しない多元主義的傾向があることを示唆している。現在に至ってはこのような傾向はさらに顕著になっていることが考えられ、将来のことより今



の生活の楽しさを優先し、一定の職業観や定職にこだわらない大学生が含まれるであろう。

## 2) 自我同一性地位と充実感および領域別自我関与水準

分散分析による充実感得点と、下位尺度得点間の相関関係、さらに、諸領域に対する自我関与の程度から各同一性地位群の特徴を検討する。

同一性達成地位は、過去に高い水準の危機を経験した上で、現在高い水準で自己投入している群である(加藤, 1983)。この群は、充実感4因子全てにおいて有意に高い得点を示しており、その充実感の中で、「充実感-退屈・空虚感」因子が他の3因子と有意な正の相関関係が認められた。このことから、同一性達成地位群の特徴としては、日常生活に生きがいを見出し、はりのある生活を送っていると自覚しており、そういった生活気分として感じる充実感に、自立や主体性、仲間との連帯感、自分に対する信頼感や時間的展望といった自我同一性統合の様相を示す側面が影響していることが示唆された。これは、Eriksonの理論や、大野(1983)の研究における、充実感と自我同一性統合度とは高い相関があるという結果を支持するものである。また、諸領域に対する自我関与水準もほぼ一貫して高く、充実している生活の具体的内容の一端や自分にとって重要な領域を主体的に選択している姿勢がうかがえる。特に、「将来の仕事」を重要であると認識する高さは他のどの地位よりも有意に高いことは、同一性達成地位の時間展望の成熟度をあらわすものと考えられる。

続いて、権威受容地位、積極的モラトリアム地位について考察する。前者は現在、高い水準で自己投入しているが、危機経験を経た上での自己投入ではなく、親や年長者の価値観を無批判に取り入れており、その事実も意識化されていない(大野, 1995)。後者は現在、高い水準の自己投入は行っていないが、将来の自己投入を強く求め、危機の中で一生懸命努力している者である(加藤, 1983)。権威受容地位群は充実感における4つの側面全てにおいて、同一性達成地位に次ぐ水準で高く、達成群との有意差は認められなかった。しかし、諸領域に対する自我関与水準は同一性拡散地位群に次いで低い。このことから、達成群と同等の充実感を量的な側面では感じてはいるものの、具体的に自分にとって重要な領域を聞かれると答えられない状態にあり、無自覚な自己投入や、アイデンティティなき達成といった様相を具体的にあらわしているものと考えられる。それとは対照的に、積極的モラトリアム地位群は、「連帯-孤立」因子では同一性達成群、権威受容群と有意な差は認められなかったが、他の充実感因子では拡散地位に次ぐ水準で有意に低かった。しかし、諸領域に対する自我関与水準は達成群と並んで高く、特に「恋愛」を他のどの群よりも重視しており、「家族関係」や「友人関係」も大切にしている。このことから、生きがいを見つけようと必死に努力している最中で、現在の生活や自分には満足していない様相がうかがえる。また「連帯-孤立」因子で有意差が認められなかった点には、家族や友人、恋愛を重視しているといった、対人関係に対する積極的な姿勢があることが関連していることが推察できる。ここには、同一性獲得の一要素である、個別性の認識の前提として他者からの受容を必要とする段階にあるという一側面があらわれていると思われる。

権威受容地位群と積極的モラトリアム地位群の共通点としては、「充実感-退屈・空虚感」因子と「信頼・時間的展望-不信・時間的展望の拡散」因子にのみ相関関係が認められたことである。「信頼・時間的展望-不信・時間的展望の拡散」因子は、自分にたいす



